

一平とマキの乗った早馬口は白金台にあった、無論ジブリマンションの荒木田に小荷物を送った人物、夏目に会っためだ。受領書に記されている住所を頼りに探し始める、程なくして四階建てのこじんまりしたマンションに辿り着いた、だけんど記されている部屋がない、二人は入り口辺りをうろついていると不審者と想われたか、マンションから出てきたダウンジャケットを着こなしたアラサーと思しき今風な女性に声を掛けられた。

「何方かにお会いに来られたのですか、何号室ですか」

「受領書を見せる、この方に会いに来たのですが部屋が見つからないんです」

「見つからないのは当然です、この部屋はありません」

二人は浮かぬ顔をして女性を見いつてしまった。

「508と書いてありますがここは四階まで、各階は一号室から五号室となっています、よってその部屋は存在しません」

「ならばこの受領書に書いてある住所は・・・」

「私、夜の商売していて十津川警部の大ファンなの、差出人が身分を明かさず送ったのと違う、名も偽名なのでは、事件性ありとでも言うかな私の推理」

はたまた二人は顔を見合わせ一平は言った、あなたならこの先どう行動したらベターとお想いになりますか？。

「さしずめ小荷物を出した配送所に行きます、差出人がどんな人だったか確認するな、この先の表通りに面した所にヤマト便の白金センターがあるよ」

「じゃーそー致すとすつか」

「ところでお二人はどのようなお方ですか、私は白金一丁目に十五坪程ながら店を持っています。ブランディーとカクテルがメインです、いらしては下さいますか」

とコマドリと印刷されている名刺を一平とマキに、二人も名刺交換する。

受け取った名刺には野鳥さんの集まる店、コマドリ、新藤貴子と記されている。

「あら文屋さんの振舞い方からそのような人かなとかと想っていた、通称タァーちゃんです宜しく」

「文屋と言っても委託された事案を調査するだけです、プロの文屋さんとはちと違う」

「私にはどうでも良い事です、私の気になるのは乗って来たサイドカー、年代もんのBMWだよねカックイー、私は十年おちのタンコロ、エストレアに乗っています。いつかはビックバイクに乗りたいんだ、そうそう言いそびれていたが私の趣味は野山を歩き回り野鳥と触れ合う事、こないだなんかお客さんに勧められてプロミナ買ったよ、高つけーのなんのつて、そんな訳で鳥撮りしてる人が多い店です」

名刺を確認しながら新藤貴子は言う。

「村上真姫さんのJK言葉は苦手ですが野鳥の話なら尽きる事はありません、グラス傾けながらも如何、お越し下さいお待ちしています」

と下瞼で細めにしそれと同調するかの様な唇をして言った、脇で相槌を打つ仕草の一平の脇腹をマキが突ついた。

「真姫さん、ご心配なく取りはしませんよ、真姫さんもご一緒に、では今晚の仕入れがあるのでこれで失礼します」

北風を避けるが如くダウンジャケットの襟を立て視界から消えた。

「ヤマト便の白金センターに行く前、三鷹の長沼所長に連絡しといった方が良いんじゃないの、他社配送便のようにそっけなくされたら掴みかけた情報が消えてしまう、所長さんに二人が行くから協力してとでも」

「マキの言う通りだ、そーしよう所長に電話してくれ」

「心地よい返事が返って来たよ、大堀センター長が待っているだつて」

そーこーしとつたらセンターに着いた、五十絡みの人が手招きしてくれる。

「大堀です、こちらへ停めて下さい、配送センターの事務所脇へ」

二人はメットごと肯き指示通り停め、メットを脱いだ、すぐさまこちらへとスチールディスクが並ぶ部屋を抜け、衝立

の裏へ、横長の机が二本並び両脇に長いベンチシートが、むさ苦しい所でと言いつつ席を勧める、配送仕様を着した女性性がコーヒーを運んできた。

「あのサイドカーがつくいい、私なんか主人が危険だからとバイクはダメ印、でも騙しに騙して原チャリに跨る事が出来た、いいなーあのサイドカー。」

怪我を心配してくれる旦那さんです、話をよく聞き大切にし仲良くして下さいよ、一平の言に分かったか分からないのか一礼しその場を離れた。

「谷端さん、三鷹の長沼から電話が入っております、何なりとお尋ねください、おつといけない紹介を忘れた、私は長沼の元上司です彼は仕事への情熱が人一倍、一回り年下だがいつしか私を追い抜いてしまった、でもあいつは偉いからと言って私には勿論誰にでも上目線にはならん、学生、主婦アルバイトでさへ数十年のベテランとでも相対仕方は同じ、私も見習わければ遺憾と想うがつい愚痴っぽく相対してしまう、あの男は起こる事を知らん、かと言ってミスった人はこれで良いんだと想わず、いつしかミセン様になった、顧客様にも信頼が厚くなり扱いも増えた」

そー言い名刺を一平とマキに、マキも一平に続き名刺を渡した。

「お忙しい所恐縮です、大まかに話は聞いていますと想います、こちらから三鷹に配送され小荷物についてお尋ねします。昨年五月二十七日と七月五日、ここより三鷹に配達された分です、このセンターへはその前日か前々日に持ち込まれたと想われます、差出人は白金二丁目のワンルームマンション508号室の夏目浩二なる人物、その人物についてお尋ねしたい。これが本人が書かれたと想われる配送依頼の写しです、送り先にジブリマンション201号室、荒木田輝夫と記されていた、その容姿は三鷹の協力で分かりました、が空き部屋利用による受け取りと見たが実態は明らかでない。で送り主に聞けば真相が分かるのではないかとこの住所の所に赴いた次第、やが部屋が存在しない、ここに来れば何か分かるのではなからうかです」

「谷端さん、お分かり申した早速調べてみよう、なっちゃんちよつと来てくれ」

大堀センター長は衝立越しに呼んだ、先程の女性が現れた。

「なつちゃんすまん、この二枚の受領書のコピーは内で預かり三鷹に出した小荷物だ、何時誰がお預かりしたか調べてくれんか」

「日時や料金の筆跡からすると私の様な気がします、いかんせん半年以前の事はつきりとは、でも日誌もあります、お待ち下さい」

と言が残しなつちゃんは事務室に。

「センター長の所では苗字ではなく名で呼んでいるんですね」

「苗字で呼ばなければ遺憾、と仰せなるお方様もおいでになりますがこのでは名呼びに徹しています、上下なく親しみも湧いてきます。中にはニックネームで呼ぶ人もいますそれもこれも三鷹、長沼流と言うか彼の経営方針です」

「自分達も一平とマキだな、大堀さんは何と呼ばれているのですか」

マキが聞いた、よー聞いてくれたとばかりに即座に答えた。

「入社、間もない人や主婦、パートさんはセンター長の方が呼び易い様です、中堅以上は誰が付けたかボスです」

「ボス、分かりました」

となつちゃんが入って来た。

「その二つの小荷物は書類として私が各々前日の午前中に男の人から預かりました、送り主の欄には夏目浩二と記され言葉少ない人でした」

「その時何かお気づきはありませんでしたか」

「到着時間を頻りと気にしていた、間違ひなく翌日の十六時から十八時に着くようにと念を押されました」

「受付時に差出人の部屋番号に疑問は」

お言葉を返すようですがとボスが口を挟んできた。

「私どもは町名番地は分かります、がチョーベランでも部屋番号まで全て把握している人は居りません」

「あいやー失礼、ではその男の人の特徴はどーですか」

なっちゃんはメモ帳に眼を落とした、

「背広をきちんと着、身長は百七十センチ位で日焼けした様な赤黒い顔をしていた。二回目の七月五日は暑い日でしたが背広をきちんと着用していました、どこか落ち着かぬ素振りまで到着時間を確認していました、と私の記憶と日誌に書かれています」

「このコーヒー、キューバですな」

「谷端さんはコーヒー通ですね、ボスなんかちつとも分かつちゃーくれない、谷端さん村上さんお代わりです」

センター長もお代わりと言いたげにコーヒーカップを眺めている、察したかなっちゃんは台所にたった。

「私共センターも三鷹同様お二人に協力を惜しみません、今後でもお聞きください」

いやー長い事邪魔してしまった、お暇しようこれから宜しく願います、と言い一平はコーヒーを飲み干し、マキを促す。

早馬は恵比寿から代官山を抜け大橋から淡島通りに入った、マキが怪訝な表情を浮かべている。

白金センターを出、それ以後会話なし、何時もならフルフェイス被ってたって大きな声で話しかけてくる一平、今日はあるとかうーとか浮かぬ返事ばかり、きつと今までの事柄を整理してんだろうそつとしとこ、マキはそう想い早馬から伝わる適度な振動と重低音を響かせるエキゾースト音を堪能する。突如一平が言った。

「いつぶくに行つてコーヒーを飲み比べてみつか」

「はい行きます、後二日で冬休みも終わり、ゆつくり出来るのも僅か」

帳の頃いつぶくに着いた、九割がた埋まっているまりがマキを見、近づいて来た。

「隅っこだけどあそこのテーブルが空いています、マキちゃん調査に付き合ってくれて有難う」

忙し気味に動き緋の着物にタスキ掛けし、かつぼう着姿のまりにマキが声かけた。

「まりさん満杯じゃん」

「ありがたい、ここん所々暮れ時はこうなの、一平なんかちーつとも手伝ってはくれない、もつとも当てにはしてんけど」

一平がPCを小脇に抱えテーブルに着く、まりとマキは意味深気な表情で迎える。

「今くしゃみしなかった」

「風邪もひいとらんし別に、どーせ小生の悪口言ってたんだろ」

「まりさんが一平は他に類のない素晴らしい人だと褒めていたよ」

「・・・満杯やないかサービスディーかや」

「こういう日は手伝ってくれるの、マキちゃんが如何にいつぶくに携わっているか分かるでしょう、満杯なのは事件がないからです」

一平はそうかと言った表情をすると同じしてキーボードを叩き始め、何時もの一平に戻った。

マキはやつぱし今迄の事を整理してたんだなと一平の顔色を窺った。

「コマドリのタァーちゃんが言っとったJK言葉って何だい」

叩く手を休めずに二人に聞きおった。

「私には分からないな、マキちゃんなら分かるでしょう」

「自分も使った事はないけれどJKは女子高校生で主にツイッターやSNSで使用する言葉です、フロリダ・その場をちよつと離脱する、カミッテル・神がかっている、ソレナー・そうだね、ガチしょんぼり沈殿丸・激しくしょんぼりしている様、パピリー（パーティープル）・パーティを盛り上げる、例えば明日の合コンをパピリたいとか」

一平は打つ手を休めまじまじとマキを見て問いた。

「良く知ってんなー何処で覚えたんだい、そのJK言葉、女子高生の友達でもいるんかい」

「道場に女子高生が通っています、休憩時間に時折スマホ見せ合いYY騒いでいる、そんな訳で自分も覚えちゃった」
そー言う言葉が今は女子高生には流行りか、一平とまりはただボカーンとするばかり、あつお客さんだとまりはその場を離れる、見慣れぬがデカだと一平は思った。

時折手を休め、記憶を辿るが如く考え込む一平に聞いた。

「マキが何を打ち込んでいるの」

と聞いた、うん、一人納得したかのように打ち込み始め徐にマキに語らい始める。

「行動不審な監察官似の男も気になる、Aサイズの小荷物送り主の住所は不明、どこかで昨年五月の転落死と繋がりはしないか、ここん所で調査した事項をまとめ整理し関連性はないか調べているんだ。小荷物を出した赤黒い男、夏目とは誰なのか」

サイホンをいじりながらまりが言い出した。

「良く言っている、捜査は一点を探すのでな、その地域等あらゆる点から調べ徐々狭めて行く、そうすればその一点に辿り着ける、一平が常日頃言ってたではないか、会社も多かろう個人商店だってスーパーやコンビニもあろう、白金と言えば各国の大使館もある」

一平の黒目が動いた。

「それだ、大使館から調べ始めよう、白金にはどの位あるかな」

客の手前小声で話していたが初顔の二人が一平に声かけた。

「初めまして高輪署の刑事、大泉ですこつちは後輩の松宮刑事、私等は師弟であるもコーヒー通です、元、名うてのデカ長さんの奥方が入れるコーヒーがいける、と所轄でも話題になっています。非番を利用し深大寺とやらも初めてです、行ってみるか今日になったしだい。小声でお話していますが私には商売柄と言うか聞こえてしまった、名うてなデカ長だが今は警察手帳はない、捜査に支障も多いでしょう、私達にお手伝いさせて下さい」

願ってもない協力者現わる、が捜査を始めたとは言え現職刑事に協力要請は出来ない、だが所詮週刊平成の名刺しか持たん一平だ戸惑い気味。

「何を躊躇なさってらっしゃる、私達がお手伝いすると言ってるんです、小生達の仕事は市民の安全と真実追及にあるとデカ長さんは常日頃言っていた、上目線せず部下想いなデカ長さん、そんなデカ長さんに協力は惜しみません」

「一平、お願いしますと早く言ったら、コーヒー冷めちゃうよ、言わなけりゃーお二人とも飲んでくれないよ」

珍しく戸惑い続ける一平に助け船らしき言をまりは言った、一平は背筋を伸ばし二人の刑事に向き直った。

「大泉さん、松宮さんお願いしますしかし今、調査している件は解決はしている、小生が情報を基に疑問を抱き独自に調査始めた次第、小生は別やがお二人は現職刑事よって相応の処分もあり得る」

「デカ長さん何を仰いますか、私達の胸中には処分と言う活字は消えています、あるのは真実です」

「相お分かり致した、捜査協力して頂くに当たり次の三つをお約束して下さい」

先程も言った通り解決済みの捜査です、多言は慎んで下さい、高輪署の刑事です所轄任務が第一で小生事は第二です、それと小生はデカ長でなく一市民谷端一平です、僅かな時に五回もデカ長と仰った。デカ長呼びはやめて下さいそして敬語も、以上三点お守り下さい」

「お易い御用、一平さん任しときな」

珍しく額に汗かいている一平だ。

そんなやり取りに笑えを堪えるかまりはサイホン持ちながら上半身が小刻みに揺れている。松宮刑事がまりに言いよった。

「奥さん、何か楽しい事があったんですか身体ごと笑っています」

「一平に聞いてみて、本人ならよく分かる筈」

十年近く谷端若しくは一平で呼ばれている、それが現役の刑事さんにデカ長さんと呼ばれ照れてんのよ、マキが一

平の代わりに言した。それを合図が如く両刑事に相談と言うか一平は問い言い始めた。

「大泉さん、麻布署管内には大使館は幾つあるかな」

「早速捜査会議やな、その前に今後は大（だい）と呼んでくれそれで松宮は（松）まっちゃんとも。大使館だがあまりにも多く正確な数は把握していないのが現実、即答は出来ないが二、三日待つてくれれば調べは可能」

「だいさん、それには及ばぬ、白金或いは白金台で分かる範囲でいー」

「エチオピア、アイスランド、ベラルーシ、インドネシア等がある」

「うむー絞り切れんなー」

「隣接にスリランカやイランもある、あつ一平さん、然程大きなマンションではないが三年前、南太平洋の小さな島々に呼びかけ建国したピース王国、その王国が二階全室を借り切り大使館が開設された。何でも海洋資源やダイビング等マリンスポーツを主とした観光立国と訊く」

「でその国の名は」

「ピース王国と言つてた」

一平の黒目が動いた。

「黒目が大きく動きましたね、私、なんか変な事言つたかな」

無理もない黒目が動き出したのはピース王国事務官、松井翔平の事故死がきっかけだ、大さんと声し今日までの経緯を事細かに一平は説明する。

「で、一平さんこれからの捜査方針は」

松ちゃんが問いただした。

「相谷監察官似の三鷹での受取人と白金で送付した夏目浩二なる人物の割り出し、そこから始める事にしよう。小生にはピース王国が絡んでいるとみた、大使館に赴き聞くのが手っ取り早いが治外法権だ、ましてや極秘捜査、そん

な事したら御上より小言だけでは済まされない、出勤時間帯に入口辺りから最寄りの駅辺りまで張り込みし男で四十絡みな赤黒い顔をした日本人のチェック」

四人は電話番号の交換をする、マキがペンで書き足した携帯番号の名刺を渡した、徐に松ちゃんが言った。

「一平さんは分かっていますがマキ（村上真姫）さんは現職のジャーナリストでは」

「いーえ幼稚園で保育士をしています、事ある毎に一平と行動を共にしています」

「幼稚園始まるまで後二日ある自分もやるよ」

マキが言う。

「自分あの辺の住民の様な顔をし歩るって見たい、今風な装いで買い物でも行くようにしていれば怪しまれんと想う」

「ばかたれ遊びじゃーねーんだ、そんな気持ちならば行かんていー」

一平は一喝す。

時ならぬ一平の言にマキはキョトンとしてしまう、無理もない道場で櫓を飛ばす以外ネガ的な言い方をされた事がない、続けざまにマキに言う。

「これからの捜査は現職刑事さんもらつしやる、個人プレイはご法度、大さんと松ちゃんの指示に従うように」男勝りのマキだが想わぬ一平の言に半べそ。

「マキちゃん、この場はハイと返事した方が良いよ」

堪り兼ねたまりが言う。

か細い声ながらもマキはお願いします、と松ちゃん大さんに言った。

「一平さん、明日より朝七時から九時頃まで通行人に紛れ捜査開始します、マキちゃん待っているよ、今風な装いをした女性がいると我々の隠れ蓑やら助かる面も多々です、又勘と知恵を絞り出し一平さんの鼻をあかそう」

「有難うございます、足手まといにならんよう頑張ります」

あーもーこんな時間か一平さん失礼するよ、マキちゃんよかったら我々が送るよ、と大さんが声かけた。

「マキちゃん良かったわねーお願いしたら」

と又もやまりが助け舟を出した。

「ハイそうです」

大さんと松ちゃんは一平に敬礼しマキを連れ開き戸から消えた。車中で気を取り直したかマキがしゃべり始める。

「父は三鷹署の刑事です、母も男勝りな刑事でしたが事件現場で殉職、母のように市民の安全と真実の為に刑事になりたい一心で勉強に明け暮れた。その甲斐あつて合格したが父が猛反発、母のように若くして仏さんにはしたくない、お前がいなくなったら村上家はどうなるんだ柔術北野流はどうなるんだ、と言って凄む。祖父でもあり道主の村上太郎がマキ、この道場はお前が引き継ぐんだ、父親の裕太郎は稽古が嫌いでとてもじゃない、道主の柄でない、引き継ぐのはお前しかおらん。常日頃そう言っていた。そんな時一平と出会った、人柄と言うか上手く説明できないが親父以上の存在に。」

一平は退職すると後ろを見ずに前のみ、刑事からきっぱりと足洗った。デジカメをお供に従い野山に海に河川に野鳥を求めて出かけ始めた、そんな一平に願った、私も連れてって、いーとひとつ返事、奥多摩へアカゲラを撮りに行った時、突如自分の眼を見つめながら壁ドンしてきた、この後どうなったと想う」

二人は顔を見合わせ若しやの表情。

「お二人さんのように自分もだつたがブブー不正解、説得感多分な声でデカ諦めろと言い寄った、催眠療法されているかの如くハイと言ってしまった。刑事諦め保育士の資格を得、幼稚園に勤務し始め現在の自分があります」

「一平さんとのルーツ有難うございます、デカ長さんはそう言う人なんだよ、さっき怒り気に想わず言つたのも我が子と想い言ってしまった事、今いっぶくで反省しきりでは、明日明後日の二日間で四十絡みな赤黒い男探しちゃうぜ」マキのスマホから峰不二子のテーマが流れる、ほれ一平さんからのSNSだ早く出んかい、大さんは急かす。

「さっきは御免だつて」

「ほれみな」

「あつ、そこを曲がつたところに道場の入口があります、そこをお願い、有難うございます」

「都営三田線の白金台駅を出た所に早朝から開いているレストラン白金がある、七時にその前で」

マキは二人にハイタッチし車から降りた。

霜柱チラホラな早朝の仙川脇をデジカメ持った一平は散策していた。水面にはコガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、カルガモにマガモさんがスーイスイ、ダイサギが下手から上へユツサユツサと飛んでくる。ハクセキレイがチヨコマカ・・・水面は何時もの光景だ、手持ち撮影其々数カット、顔見知りの散策者さん達がおはようさんとすれ違い追い越して行く。

折り返しの公園では数人が吐く息白くストレッチ、一平は木ベンチに腰掛け、ポッケに入れといた自家製ハチミツ入りスペシャルコーヒー一口二口。

七時を回った、朝飯の時間までに帰らんとまりにお咎めを食う、早馬を停めておいた停車場に歩を進める。

「おかえり」

まりが台所でトントンしながら声かける、

「今朝は湯豆腐に納豆、タマゴ焼きにトマトのスライス、味噌汁の具はタマネギ、エノキにコマツナです」

ラジオからは今日は松飾りを外す日とか言っている。

「おっそーか忘れるとこだった」

「一平がそれを忘れるとは珍しいね、マキちゃん達が気になるんじゃないの」

「小生も加わりたいたいとこだが今日はマキに任せよう、その方がベターやろ」

「何の連絡がないのは順調かそうでないかだ、私は前者と想う」

「小生もそー想っているんだが・・・」

「お二人の土地に明るい刑事さんもあります、お任せして吉報を待ってたら」

ごつさんと一平は言い画像編集兼PC室に消えた、八畳だが応接セットが半分ほど占領、手作りのPC長机が居座る、同じく手作りの本棚が天井まで。その部屋で小一時間監察官似とか赤黒い男、ピース王国とかキーボードを叩いていた。

まりがいつぶくの準備に階下に行く頃、息抜きに行つてくると撮影機材持ち現れた。
はいとまりは返事し気分転換も必要、行つてらっしゃいと送り出す。

鳥撮りポイントでは諸先輩方が新年の挨拶を交えながら談笑中、鳥撮りプロの叶山拓也さんもいらつしやる、野萱さん、大久保さんに永友さんに長谷部さん等々錚々たる鳥撮りさん達だ、小生も今年も宜しくお願いしますと新年の挨拶を交わした、

「今日はマキちゃんはどうしたんだ、喧嘩でもしたのと違うかや」

と野萱さんが言う。

「小生等には喧嘩は皆無」

「そうやつたな、では何ゆえに一平さんだけや、わしゃマキちゃんと撮り始めの挨拶したかったんやで」

「昼過ぎに電話が入ると思う、野萱さんが今年も宜しく言つてたよと伝えます」

「撮り初めに欠席とは体の具合が悪いとか、身近でよんどころない事情でも」

「今日と明日の二日間小生が頼み事をしたんだ」

「柔術の稽古の次が一平さんとの鳥撮り、それ程までにも楽しみにしている、その鳥撮り始めに来られんほど重要な頼み事をしたんかや。いつぞや言つとつたキスゲ橋での事故死、何やら情報を掴んだんでは」

「今は一市民です、解決済みを再調査なんぞ出来るわけがない、次の休みにはケロッとした顔して皆さん今年も一平以上に宜しく願いますと来ますよ」

「そうかい楽しみにしとるよ」

午前十時十分、大通りに面したレストラン白金の窓際に大さんと松ちゃん、それにマキが打ち合わせ通り座った、張り込みの情報交換を始める。さすがは刑事さんだ、捜査がばれん様この町白金に溶け込んでいる様な装う、しかも開始した時と違う、自分なんかウロウロしてるだけ、あそこのブテックなんか何回も行き来し店頭を掃除してる人にあら又通るなんてと言う顔されちゃった、とマキが言う。

「マキちゃん我々はこれが商売、悟られんよう捜査が鉄則、我々は常日頃この手を使う、今回は四回も着替えしてんだよ、白金台交番に極秘捜査中と言いそこで着替えた」

いらつしやいませ、店員さんは心得たもの大さん等は良く使うのか三人分のコーヒーとトーストを運んできた。

「一息入れに良く来るんだ、ここでは商社マンで通しているんだ。でマキちゃん成果はどうだった、四十絡みの赤黒い男は」

「はい、通勤時間帯だ、人が多く見つけるのがたーいへん、女性も日焼けした様な人もいたし、だけど三人ばかりそれと想える人が、正面からは無理だったけど横顔を、目瞑って盗撮しっちゃった。この三人です」

モニターで三人を見せた。

「コートの襟が被っているけど赤黒い人が確認できるでしょう」

「人物を特定出来るまでとはいかないが、よう撮ったね」

「一平の奴、無償提供するからしつかり撮って来い、と7200に300mmのズームを付けてくれた」

「一平さん、良いところあるじゃないか期待できる画像を撮らんとな、その三人我々もマークしていた、駅から私がつけ途中で松ちゃんにタッチ、ピース王国のあるビルに入って行った、我々にはマキちゃんが見え隠れし撮影しているのが見えた。人々の眼にはマキちゃんは盗撮者に見えたに相違ない、通報でもされたらとヒヤヒヤしてた」

「気が付かなかった、ごめんなさい気を付けます」

「でもそれらしき人物はいた、吉と出るか凶となるか収穫はあった、今日より明日だ、前向きで行こうぜ」

「一平も良くそのセリフを言う、自分と一平の出会いは何時ぞや言ってた通り、村上眞姫のルーツは言ってたなかったね良かったら話しますよ」

大さんと松ちゃんは同時にコックリ。

「自分の曾祖父は海賊の異名をとる村上水軍の末裔、そのまた末裔の・・・あたりです。明治中頃仲間二人を連れて今の三鷹市に柔術道北野流道場を開いた、当時は百人を超える門弟がいた、大正をへて昭和に入った、やがて現道主村上一太郎が生まれたが太平洋戦争に突入、門弟らも徴兵を余儀なくされた。終戦を迎え師範や門弟も徐々に戻り始めた、無念ながら帰らぬ師範門弟も多かった、が曾祖父は無事戻った方々と道場を再建した、曾祖父は高齢故道場を爺っさま一太郎に譲った、その後門弟も増え道場に活気が戻る。父裕太郎が生まれ自分の誕生に繋がった、しかし時代の流れと言うかスクワット運動には耐えられなくなった門弟が続出した」

「それきついんだいなー、学生の時柔道の朝稽古は先輩が初めに必ずやれと言うんだ、今想えば先輩の顔が鬼に観えた」

松がぼそぼそと言う。

「世間には村上水軍は瀬戸内の海賊と想われていた、しかし潮流厳しき海域で舟の安全航行を手助けする軍団、渦潮を避け潮流を避け案内し航行安全を約束し金子を頂いた。案内ご無用、物見遊山とでも言いたげに行くが多くは急流海域で為す術なく救助要請。禪に丸に上の字の半纏羽織った若衆が小舟で荒れ狂う海峡で近づき依頼舟に飛び移る、前後に分かれ青竹で海中へ突き刺し舟を操った、程なくして脱つする。

水先案内料と称し金子を頂いて見送った、不屈き者もいる案内料を払わんで行こうとする、舳先に舟を回し停め徴収もしばし。お侍いさんが大勢乗った舟なんか公の海で金子を取るとは無礼であるぞと太刀を抜く、素手と青竹で応戦し案内料を徴収も稀ではない、それ故水軍ではなく海賊と言われる由縁。村上水軍は瀬戸内安全航行を

約束し利益を得ていた。とある小大名が利権をよこせと迫って来た、村上水軍は青竹と飛び道具で応戦せしと団結、飛び道具は鉄砲ではない飛び跳ねる、逆巻く海峡で舟から舟への確に跳び移る、それです」

二人は浮かぬ顔をした。

「海峡の激流で鍛え挙げた肢体そして素手での争い方、三間位のその場跳びなんぞいとも簡単、一間半位の横枝に飛び乗るも同様、又素早くくると回転し相手の背後に回り後頭部に一撃、それが水軍の飛び道具です、そして来島・能島・因島の三島村上は村上武吉を総大将に能島に籠った」

大さんと松ちゃんはコーヒーが冷めてしまうもマキの話聞き入った。

「敵将は我が軍の十分の一にも満たん小童ども、争う前に利権を渡すだろうとほくそ笑んでいた。が武吉は一向に白旗を挙げん、業を煮やした副将が采配を下し本陣のある能島へ小舟に分散させ兵を向けた。その数大凡百隻、水軍を甘く見やがったけん、腕組みをし櫓で見た武吉が言った、馬鹿どもこの海域を知らんのか・・・、船団は島に近づくに連れ隊列が崩れ始め転覆続出。それを見た武吉は檄を飛ばした皆の者救助に向かえ、手向かつて来ても殺してはならんけん、生かして砂浜に集めろ。浜辺には八百を超える敵兵が正座されている。武吉が言う、今なら潮流も穏やかだ戻れるけん、手出しはせん戻ってよかと、敵兵にどよめきが、二隻に分乗して十三人が砂浜を離れた。見送った武吉は残った敵兵に言い始める、十分とは言い難いが衣食住は保証する我が方に付かんか、敵兵は各々顔を見合わせたが何処からともなくへいと返事が」

大さんがその後の小大名と水軍はどうなったと言った。

「武吉は言い続けた、敵は又やって来る、しかも潮流の穏やかな時に、でだ、その時皆衆にひと肌脱いで頂く、副将が大將が乗り組んで来る筈、その時数隻の船に分乗し仲間宜しくきつと迎えに来てくれる、と信じていたと出迎えてくれ、その後手薄な場所がありますと反対側の入江に導く、大將こちらですと上陸させる。人影無き入江に安心させる、頃合いを見わしが出迎える。敵将は利権を渡す気になったとか言う筈だ、それを聞くと同じしてわしは右手を振

り下ろす、皆衆は敵將と共の者に竹やり突きつける、閑散としてた入江だが茂みの奥から数百の水軍が飛び出し敵將等を取り囲む、見計らい、敵將にわしが檄を飛ばす、瀬戸内の海から出ていけ！と、下った兵等は水軍の策に感心するばかり。わしらも頑張ります何なりと仰せ使わさい、あの大將はわし等の事なんぞなんとも想っちゃーおらん、ポロばかり着せられ日ににぎりが二個あればいい、家だつて四柱に杉皮が葺いてあるだけだけん、武吉様、付いて行きますけんのー。四日後水軍は無血大勝利。秀吉が海賊禁止令を出すまで瀬戸内一帯の海を制した、その後は各大名の家臣となった。皆、海と遠ざかったが肢体を鍛え素早い動き健在、柔術北野流の礎になった。自分も前後転はお手の物、飛び跳ねだつて、あそこの庇だつてひょいと、対一で素手ならどんな大男だった勝てる自身あります、どう相對してみます」

いやー遠慮しときますと大さん、松ちゃんどうだいと振った、無言で首振る。

「ごめん喋りすぎちゃった、自分は張り込み不慣れと言うか無知同然、お二方と同じように着替え持つてこようかな指導宜しく」

「今日の三人を、できれば正面から怪しまらないように気づかれんように撮影せねばならぬ、今日張り込んでたら幾つかポイントがあつたようだ、チャンスは一回だけと想つてスマホで連絡は密に」

「白金台の交番へ着替えさせてと言つていて」

「御安い御用、けど若い巡査は眼パチクリさせんじゃーないかな」

「パチクリは構わんけどサービスないよ」

「承知した、一平さんに朗報出来るよう頑張ろう、明日七時今朝の場所で落ち合おう」

マキは大さんと松ちゃんにハイタッチ、今にも白い物がチラつくかの鉛色の空を見上げ別れる。

いっぶくで一平は何故か難しい顔してキーボードを叩いている、まりが察した、マキちゃんから情報が入らない、きつとそうだ一平に話しかけた。

「張り込み、人探しはマキちゃん始めてよ上手いかなくったって当然よ、二人の所轄刑事さんも付いている、明日には朗報は入ると思うよ」

「思うじゃー困る、入らなきゃーいかん」

「連絡ない所を見ると確信までは行っていない、明日は入るわよ」

気休めかーと言ってPCを閉じた。

二人の刑事、其々ダブルとシングルで色違いなサイドベンツのテラーダスーツに身を固めていた、マキは珍しくパンツスーツにコート、三人は打ち合わせ通り落ち合った。

「マキちゃんいいか、わしが駅出口付近でそれと無く昨日の思しき人物を待つ、松ちゃんはマキちゃんと世に言うカッブルになってくれ、腕組みは勿論壁ドンも構わぬ、だけど通行人に怪しまれんようにカッブルを装ってくれ」

マキはやったーと言いたげに顔が緩んだが松ちゃんは固まった。

「松ちゃん、そっちの方は自分が先輩の様だねリードするから、三人の男を見つけよう張り込み心得をお願い、ケースバイケースで宜しく」

よーやく正気に戻ったかマキと大使館方向の持ち場に向かう、マキが松ちゃんの腰に腕を回した。

「マキちゃん、経験ないとは言わんが緊張するなー」

「なに言ってるのよ、文武両道使かいなホープが、いい、歩調合せ行つた先々での食べ物の話とか刑事ドラマ、はたまた真田丸、松ちゃん好みの女性の話とかしながら歩くのよ、そうすれば自然体が保たれる」

「そうか楽しくなってきたよ」

そうこう言いながらポイントに着いた。

「歩道橋の階段が撮影時のブラインドになってくれる」

松ちゃんが約70M先のこじんまりしたビルを指さした。

「大使館の入っているビルです、その先僅かな所にも歩道橋がある、この二つが撮影ポイントです」とマキに説明する。

「僕は仲間から高倍率なデジカメを借りてきた、マキちゃんは慣れ親しんでいるその一眼レフで、大さんより連絡が入ったら二手に分かれて撮影」

「何で二手に分かれる」

「一緒に撮っていると目立つし通行人に怪しまれる、不審者通報も無きにしも非ず、極秘捜査でもあり刑事がお巡さんに職質されたんでは目も当てられん、通行人に何を撮っているんですかと聞かれれば白金台の風景を撮っているんですとも言えば道理が適う。又一人で撮っていればそれと無く自由がききより自然体が保たれる。」

七時半と八時チョイ過ぎが要注意時間、大さんが見かけたなら電話が入る、そしたらスタンバイ、どっちの歩道橋でも良いよ気に入った方へ、僕は残った歩道橋で構わない」

とマキに説明。

「まだ時間には間がある、ここで屯しては通行人からは目につきやすい・・・」

「いつ現れるかもしれん、今度は腕組んで早朝デートと行こう」

カップルは時にはクスツと笑みし談笑しながら歩を進める。

「土地柄か通勤者に交じり異国の人も多い、赤黒い顔をした女性も数人、ピース王国の人と違うかな」

「とは限らんな南方系の大使館員も多いと思う」

とか言いながら思しき人物探し、駅近くでUターンし息抜きと称しブテック店を窓越しにウインドショッピング、松ちやんの電話が鳴った、

「現れたぞ配置に付けコートは着ていない、グレーに縦じまが入ったスーツ着ている、ネクタイ無し靴は黒だ」

「了解しました、あつ」

「どうした何かあったか」

「もうマキちゃんが歩道橋方向に」

「そうか後れを取ったな、ボツケ画像なんぞ撮るなよ」

歩道橋脇でマキは待ちきれずに引つ張り撮りつづける、下手歩道橋でも松ちゃんが不格好ながらも撮っている、二人は赤黒い顔の男がピース王国大使館に入るのを確認、ディスプレイを見せ合いながらハイタッチ。

すかさず大さんに電話、松ちゃんは撮れてよっぽど嬉しかったんだろう、見えもしないのにばつちりだよとVサイン、マキちゃんも良い角度で撮っていました。

「次がある、着替えでもしながら一息入れな、お前等が終わったならわしも着替える」

「ありがとうございます、そうします。マキちゃん着替えだ交番に行こう」

気を良くした二人はルンルン気分、小指どうして触れ合い五本指で手握ったりカップルそのもの、松ちゃんは警察手帖見せ着替えさせて下さい。三人の交番勤務巡査は朝から何事かと戸惑い見せた、がどうぞこちらでと開き戸を腕で示した。

マキちゃん僕が先に着替え大さんと交代すると言う、はいどうぞマキは初めての交番でも差し障りない返事。五分経らずしてGーインズ仕様で出てきた、首には手編みマフラー巻いている、大さんと交代する。

「着替え終わったら僕と合流」

「はい着替えます」

のマキの声に三人の巡査は半ば固まった。無理もない狭い交番内、壁隔てた裏で若き女性が着替える。

「サービスは無いけど自分は大丈夫、普段通りで勤務してて」

はーとか言いながら平静に務める。・・・地味色なれど短パンにカラータイツ、スニーカー履いたマキ仕様が現れた、長め髪のポニーテールを解きブラシで三方に、ダウンジャケットを羽織りバーバリーの襟巻を無造作に巻いた、着替えもの

はここに着払いで送つてと言ひ交番を後に、巡査等は敬礼で見送る。

程なくして大さんが入つて来た、巡査は問ひした、あのマキとか言う女性は何者ですか、そのうち分かると言ひ着替えに、カーゴパンツ姿の警部に啞然する巡査等に任務ご苦労さんと敬礼する。

マキは松ちゃんと合流、未だそれらしき人物現れないソフトクリーム買って来るよと数軒先ののぼり下に、美味いと言いつつコーンをがりつとした時大さんが戻った。

「張り込みの基本を忘れずに」

「大さん、それは松ちゃんに言われています」

「そうかそれならばいいよ、間もなく第二第三の男が来る時間だ、ぬかるなよ」

「任しといて、一平譲りの撮影法です、狂いはありません」

「ホッホー、そうだったな望遠レンズの扱いは人一倍とか」

大さんから電話が入った、

「二人目が行ったぞ、持ち場に付け狂うでないぞ的確に撮れ、ワッウオー、十数メートル後に三人目が」

マキは武者震いをし松ちゃんは時折感ずる北風が額の汗を拭う。

十時過ぎ三人はレストラン白金の窓際に居た。お疲れさん、大さんはマキと松ちゃんに労を労いコーヒー頼む、と店員さんに告げた。

「二人の顔色を見ると撮影は上手くいつてる様だな」

「バッチし見て、モニターで拡大する三人の男達です、顔の赤黒さが出ているよ」

松ちゃんも見せながら三人とも大使館に入って行つたと伝える。

「顔写真を含め数枚づつベターな画像を引き出しUSBに取り込んでくれないか」

任しといてと、皆で選んだ画像を処理機能をリズミカルに扱い始める、大さんと松ちゃんはその軽快な手捌きに脱

帽感頻りと見ている、五分後出来たよとマキが言う。

「こうしてフォトフレームに繋ぎ転送、画像が次々と液晶に映し出される、それでUSBを差し込みコピー、両方に入ったよ更にもう一つ差し込んだ、これは自分と一平用です」

一連の手慣れた作業に大さん達は口出すすがなかった。レタッチ完了を待ってたか店員さんがコーヒと分厚いトーストをおまちどうさまとテーブルに。

「それらしき人物の写真は出来た、又ピース王国に入ったのも確認取れている、そうだったな」

はっはい、モグモグしながら間違いありません、松ちゃんはトーストを頬張りながら答えた。

「大さんたら、急に言うんだもん松ちゃん喉につつかえちゃうよ」

「あいや申し訳ない、ゆっくり食べてくれ」

頃合いを見計らい大さんが言い始めた。

「マキちゃんならどう行動する、一平さんに成果を報告する、それと」と

口籠った。マキはどうしたもんかと言いたげな表情をしていた、突如あつと発した。

「あの男さっきの赤黒い男だ」

と大さんに告げる。

「間違いない三番目の男だ、茶系のスーツ着用のせいかな顔が一層黒い様に見える」

松ちゃんはフォトフレーム覗き大さんに向けた。

マキは空かさず一眼レフを窓にあてがい数カット、これもUSBに入れますと。

南に行くほど海水魚は鮮やかさが増すんだ、太陽光線が強いからと聞く。日本人も海水浴に行けばすぐ日焼けしてしまう、冬場は少ないが夏は日焼けした人人、ピース王国は海洋国、日本人の大使館員なら何度となく赴くだろう、女性の日焼け防止策取ろうが男性は冬でも日焼けは常と想う、等々とか誰とはなしに小一時間雑談を交えて

いた。

大さんが切り出した。

「マキちゃん、宅急便の白金センターに行きこの画像を見せに、不審物を発送した人物の確認に」

「はい、分かりました」

「我々はセンターには面が割れている、何事かと構えられては元も子もない、画像を見せどの男が発送人夏目浩二であるか確認、我々と相対す様にごく自然に聞けば良い、センターの50M先に小奇麗なコーヒーショップがある、そこで待機している。どうだいやってみるかい」

「刑事になる為に勉強したがヘビーバッシングに合い断念、が今その刑事紛いな行動、望むところです任しといて」

一月初めだが風もやみ陽だまりでは暖かさを感じる、暑がりなマキはコートを脱ぎフットフレームと一緒に小脇に抱えた、スニーカーなれどモデル風に脚を交差させ闊歩し始める。昼時だ、町では昼休みを堪能してる人人、そんな人達とすれ違う、振り返る人も少なくない、そのモデルウオークするマキと今迄語り合ってた大さんと松ちゃんは優越感と言うか誇らしげ頻り。

白金センターに着いた、プラットホームで大堀センター長が仕分けしている。マキを見つけ手を挙げたマキも軽く会釈、大堀センター長は俺かとはかりに手を返して指さした、マキは会釈で返した、事務所にどうぞと手招きする。カウンターの事務さんが言う。

「送りですねこちらの用紙に記入して下さい」

「いえ、センター長さんに用事がありました」

そんなやり取りを背越して聞いていた配送仕様の女性が振り向いた。

「あらマキちゃん、今日はどうしたの私のコーヒー飲みたくなったの」

「それもあるけど今日は写真見て頂きたくて来たの」

「あそうだったの、奥の休憩室で待ってて今コーヒー入れて来るから」

そうこうしてたらボスが癖なのか敬礼しながら入って来る。

「今日は何用で一平さんは」

「先日お伺いし三鷹へ小荷物を送った人物、夏目浩二と思われる画像を持ちました、確認して頂きたい、一平は急用ができマキ頼んだと言い出向いてしまった、今日は自分一人です」

コーヒー入ったわよと宮城奈々子（なつちゃん）が入って来た。

「熱いうちにどうぞ、それにしてもマキちゃん今日もその容姿、今風と言うかマキファッションきまつてるね、通りすがりの諸氏が黙っていないだろうに」

「知り合いとそこまで一緒だったんでただすれ違うだけ、別にどうって事は」

「今日来たのは何用で」

「あそうだった、なつちゃんに言ったんだけどフォトフレームフレームに入っている画像を見て頂きたい、百枚程思しき人物を撮りました、その中の三人に絞ってここに入れてあります。確認して下さい」

「小荷物を受け取ったなつちゃんの方が俺より分かるだろう」

「有難うございます、なつちゃんお願いします、こうすると画像が変わります」

マキはフォトフレームの画面をタッチしスクロールやらピンチアウト出来ますと説明、なつちゃんもPC携わってるせいか動きがスムーズ。

なつちゃんがあつと発する

「この男です、茶系のスーツ姿見たら記憶と一致した、三番目かなNo.3に入っている画像もそうです。其々前日の午前中預かった、翌日の到着時刻を何度も確認し念を押された、短髪ながら分け目をしっかり入れていた」

「なつちゃん有難う、他に何か気が付いたことは」

考え込むもコーヒー一口二口。

「そう言えばつり銭を用意してたら電話が鳴って出入り口の外に、ゴメン出来ている二番目の引き出しの茶封筒に入っている、それに帰ったばつかだ体が痒くてならん、顔もヒリつくとか、その話は電話じゃーなんだ戻ってからにしよう等々。良くしゃべるが事小荷物出しに關しては余計な事は言わなかった」

「有難う御座いました、魚介類が美味しい店で焼酎ロックでやりましょう、ボスもよろしかったらご一緒に」
「俺はコーヒなら兎も角飲めん」

なら軍資金でもとなつちやんは掌を返して差し出した、ボスの表情が僅かながら動いた、それは今ではないだろうと言いたげな仕草をした。見境なく言い出せる環境の白金センター、こう言う営業所が伸びるんではないかマキは想った。

マキがVサインしながらコーヒーショップに入って来た、大さんと松ちゃんは軽く手を挙げ返す。

「収穫があつたようだね」

「大あり、三番目の男が夏目浩二に相違いなし」

「女で一人、捜査聞き取りしかも初陣、さすがだねーマキちゃん」

「それもこれも大さんと松ちゃんの的確なるご指導のお陰です」

「吉報を一平さんに伝えよう、信頼おけるのは三人の中じゃーマキちゃんだ頼む」

一平は電話が入らない、イラつき加減だ、いっぷくでHPアップ作業勤しんでいた。

時折キーボード叩く手を休め表を見つめる、四時を少し回った頃だがもー暗くなってきた、帳が迫る今日も終わるかとかブツブツ、突如ルパン三世が喚き始めた。

「ヌツ、マキからだ○か×かどっちだろう」

スマホをオンにした、でかしたぞと想わず言いカウンター内のまりに微笑んだ。

「一平の為にマキちゃんだって一生懸命なのよ、ご苦労様と言ってやって」

「でかしたぞと言ったじゃーないか」

「それはそれ今晚か明日にはマキちゃん来ると思う、壁ドンしてでも有難うだよ」

「相分った、そーするよ」

マキは今から帰りますと言う。

「そっからなら七時頃には来れるだろう、いつぶくで待ってる」

受話器からはまりにも聞こえるような外しつ放しな声で了解。

七時ちよい前にマキはただいまと弾んだ声とともに入って来た、一平はまりに常日頃する様に一平は右手を腰に回した、マキは自然と寄り添い添いPCの置いてあるテーブルへ、よつこ両人と馴染の刑事さんが掛け声、一平は照れくささを隠そうと必死だ、そんな仕草の一平にまりは笑いを堪えた。

「二日間慣れぬ張り込みご苦労様、そんで小生にやー願ってもない成果だ有難う」

そんな一平の言にマキの眼にはうつすら熱いものが、他に気付かれんよう話し始めた。

「白金より三鷹に小荷物を出したのはピース王国大使館員の夏目浩二に間違いなし、この男ですと2L版の写真を数枚テーブルに広げた、後二人大使館員が写っているが参考にするならばこれらですと同じく数枚広げた。大さんと松ちゃんのアドバイス宜しく撮れたよ」

「この写り週刊平成の写真部まかつしやうな、どれも良く撮れている公開捜査は出来んがこれからの事、大さんは何か言ってたか」

「大使館員、相谷監察官似の荒木田輝夫へ小荷物を送った、受け取り時に不審な動きも気になる。突っ込んで操作すれば真相究明も、厄介なのは大使館員だ、治外法権で阻まれること請け合い、相谷監察官にはご近所を良く散策されるんですかとか聞いても良いが、はぐらかさせられる事うけ合いだし、荒木田輝夫なる人物が若し監察官本

人であつたならば警戒もされ、職権乱用で捜査中止もあり得る、で今後の捜査の進め方を一平さんと相談したいと言つてた。昼頃なら気兼ねなく受ける事が出来る電話してくれつて」

「相分つた、そーしよう。小生も腹減つた寿し食いに行こう」

「キャッホーそー来なくっちゃー」

深大寺外れにある知る人ぞ知る隠れ家的存在の寿し処に着いた。らっしやーい大将の威勢のいい掛け声。

「おつ今宵はマキちゃんも一緒かえ」

「はい、腹ペコペコやお任せコースお願い」

「よっしやー任しとな、オーイー一平さんとマキちゃんだお茶ー」

「若女将がマキちゃんいらっしやい、お茶熱いよ氣負つけて」

前後して女将がカウンターで巻物を始める、くるつと簾を解いた柳包丁を左にサクサクと巻物に入れる、舟の船尾に素早く、食欲誘うが如く並べる。

「マキ、これが見たくつて小生はこのトンボに掛ける、上手だろう」

「いつ見ても鮮やかな手捌きだ」

舟を大将へ回す、マグロにブリに中トロ、ホタテ、サーモン等々が舟に載る。

「マキちゃんできたぜ」

それにしても今宵はここん所見た事のない表情してる、珍鳥でも撮つたんと違うかと大将が言う。

「珍鳥中の大物だよ」

「おめでとう、サービスしちゃえー」

女将が言う。

一平は翌日水生園でアオジさんを撮っていた、深大寺の鐘が昼三十分前を伝え始める、アオジさんに又なと手を

挙げ別れた、いつぶくでジャンボトーストと野菜サラダの昼を摂った。

大さんが言った通り電話は直ぐ繋がった、

「谷端一平です、先日はありがとうございました、大きな手掛かりを頂きまして」

「いやーマキちゃんの活躍があつたからですよ」

「足手まといにならないかと心配しとつたんです」

「一平さん仕込みと言うか撮影技術は確かなものです、でお聞きになさっているかと想いますが今後の展開を如何様にか、相手が相手だけにそして極秘捜査、ご相談したい今晚よろしかったら」

「承知しました、で時間と場所は」

「白金二丁目にワンルームマンションがある、その地階に、ブランディーとカクテルの洒落た店がある」

一平はあつと声をあげた、その店ひよつとしたらこまどりではと聞いた。

「罪のおけんなー一平さん、いつの間にタァーちゃんと」

「送り主を訪ねて行った時、部屋が無くてうろちよろしとつたら声かけられ・・・」

「そうかそんな事があつたのか、それからマキちゃんを連れて来てくれんかな、松の奴マキちゃんがいると普段以上の働きが出来るような気がする。こないだも仕切ってたよ」

「連れて行くよ、五時まで幼稚園だから六時半頃には行けんだろう」

「わしと一平さんは六時半に落ち合う事にしよう、一平さんだから言うんだがこまどりは良く使うんだ、上部に知れたら訓告もんだ、捜査に行き詰まった時にはブランディーをチビリチビリやっていると出口が見つかるんだ、成り行きもあるが明日もそうさせて頂きたい」

「臨むところ、じゃー明日」

マキは三学期の準備に余念がない、バンダナで髪を束ね忙しなさ一入教材揃えや箒にモップと動き回っていた。峰

不二子のテーマが鳴った、一平からのラインだ手を休めスマホを取り出した、想わず顔が綻んでしまう。三学期の準備から職務中だ辺りを見回し素早くOKと打ち返した。仲のいい先輩でもある教頭の柳田麻耶が箸持ち姉さん被りで後ろに立っていた、

「マキ先生、仕事中はスマホはダメですよ」

はーい、しどろもどろな返事を返した。

一平はコマドリへの階段を下り無垢の開き戸を開けた、暗めな店内だが許可内か違和感はない、カウンターが左側から円弧状にあり他は無垢材のテーブル席が七席、静かにクラシックが流れている、カウンター内に二人のウェイターとやや胸が広がったドレスを着たタァーちゃんがいた、一平を見つけ出て来る。

「私に会いに来てくれたの有難う」

「今宵は人と待ち合わせなんだ」

「なーんだー、でもいいやゆっくりしてって」

大さんが右手を挙げて招く、脇で松ちゃんがあれつとした顔で会釈する。

間もなく来るよと一平は松ちゃんに告げると表情が戻った。

「一平さんここは今は亡き名優の石原裕次郎が好んで飲んでいたと言うレミーマルタン置いてある、カクテルはジェームス・ボンドが007カジノロワイヤルでオーダーしたマティーニだって作れる」

と大さんは言う。

「一平さん今宵は早馬☞ではないんでしょうね」

「無論やコマドリと聞いちゃー帰りは手綱持てん置いて来た」

店内は野鳥の大写しが掲げてある、又以前聞いたが鳥撮りさんらしき人が数人談笑している、ここも土地柄か異国の人もいる、タァーちゃんがお通しを持って来た。

「こんばんは大さんにはごひいきにして頂いています、一平さんもごひいきにしてね、だけど今宵はどう言う取り合わせ、刑事と文屋は敬遠の中では、ここでドンドンパチパチ始まっちゃー否よ」

「タアーちゃんに合っちゃー敵わんな、今宵はそんなじゃーないよここにいる刑事、イケメンだろう、一平さんが多少のツツパリ感はあるがお似合いの女性がいる、合わせるから席を設けろと仰せになった、間もなく来る」

松ちゃんはフィクションとは言えそわそわニコニコ、一平は大さんの言に多少じゃーなく多分だと微笑み絡みでブツブツ。白金高輪駅を出た所でマキはくしゃみをした、誰か噂してるんだろうか、ダウンコートの襟を立て足早に白金二丁目方向に、そしてマキは無垢扉をスーッと開け店内に入った。

「あつー、マキちゃんいらつしゃい、ついやーそのーあつ」

と意味深な小声を発しあちらにおりますと手招きしごゆっくりと。

「遅れて申し訳ございません、乗り換えに手間取っちゃつて」

「十分は遅れに内には入らん、うちのなんか三十分は序の口一時間も平気」

「だけど風邪ひいたかな駅出た所でくしゃみが二発」

三人は顔見合わせ想わず苦笑する。

「自分今何か変な事言ってしまったかな」

「言つてないよ」

「じゃー今のは」

皆無言で素知らぬ素振り、オーダーとタアーちゃんに眼で合図。

「一平さんどうだいレミーマルタンボトルで、マキちゃんもまあまあだと聞く、四人いればいけるだろう、ここは表示してもあるがリーズナブル」

「相分ったそれでいこう」

大さんはタァーちゃんにそれを告げた、それに腹に少し入れよう何か頼むよと言った。

「任しときー、ちよつと待っててね」

「ではアルコールが入らん内に本題といこう、三鷹で小荷物を受け取った監察官似の不審な行動をした男は監察官本人なのか荒木田輝夫なる人物か、写真を手に入れ配送員に見せ確認とればいいだろう、夏目浩二なる人物はピース王国の館員なのか否かだ、大さん何か妙案でも」

「三鷹の監察官似の件は一平さんの言う通り、で大使館員は昨日電話入れた後松ちゃんと話したんだ、一平さん等は白金センター長とは通どうし、宅配車両を一台お貸しできないか聞いて頂きたい、可能であれば宅配便を装い三鷹営業所より監察官似の荒木田輝夫からピース王国の夏目浩二宛に小荷物を届ける、本人が居れば素直に受け取るだろうし居なければ送り人と受取人の名で動揺がある筈、この時相対した館員の表情を察知すれば今後の捜査に役立つ」

「いい選択枝かもしれん、誰が宅急便に乗る」

「自分がやります乗らせて下さい」

とマキが一平に迫った。

「小生は構わんが決行は平日だ幼稚園があるだろう、どーするんだ」

「教頭さんはいつも許可してくれる、又休むの、しょうがないわねー今回だけよつて、行ってらっしゃい休みボケしないように翌日は元氣に来なくっちゃーだめよ」

「マキ、それ許可じゃーねー、マキ流に休むだけだ、そのうちずーっと休んでいいと言われるぞー」

「そんな事ないもん、宅急便乗務いつ」

大さんと松ちゃんは静観のみ。

「大さん申し訳ないな言い出したら効かんのよ」

一平の心配をよそに喋りまくるマキを見て静観を破って松ちゃんが助け舟を出した。

「僕もお供します、傍にいてお手伝いさせて下さい、一平さんそれなら良いでしょう」

一平はしぶしぶ了承す。この件とキスゲ橋での事故死が繋がるかは不明、されど繋がったとしたら危険も在りうる、そんなリスクをマキにはさせたくはない、そんな一平ごろを松ちゃんは察していた。

「で一平さん決行はいつにする」

「平日が望ましいのは言うより明ら、早い方が良い明後日の一月十七日にしよう、白金センターで配送する時、如何様にすればいいか聞かねばならんし車の手配もある。明日手筈が整ったら電話入れます」

大さんと松ちゃんがコックリする、同じして大皿に山盛りのオードブルとレミーマルタンをタァーちゃんが持って来た。

「松！、マキさんと仲良くやれよ、あそこのカウンターが空いている」

と大さんが指さした。

一平もマキに明日があるんだぞと一喝、分ってるがなと言いつつオードブルを半分持った。

「大さんすまん、何時もあーいうー調子や」

「一平さん二人に任しとけばいい、今回の作戦、上手くいくような気がする」

「明日白金センターの大堀さんに会い、玄関前がどのようになっているか、通用門は宅配便の授受法等確認しとかなければ」

「我々の情報によると玄関と通用口があり玄関は要人用、普段は閉ざされていて館員は通用口を利用している、玄関の並びに警備室があり身分証明書の提示が必要、それ以上は分かっていない」

「ありがとう、後は白金センターで聞くとしよう」

大さんはレミーマルタンを喉に転がしながら言った。

「俺の思うに、ピース王国に何かあると睨んだが」

「現時点では大ありの様だ」

タアーちゃんが難しい顔しないで、と前屈みになりながら二人のブランデーグラスに適量注ぐ。

「タアーちゃん、否応なしに谷間が覗けるその仕草、それに何時も負けてしまう二杯三杯……、心地よくなり時間だお愛想を告げられ勘定書き見たらいつ頃に冷めちまう、今宵はそうは行かんよ」

「常日頃私なりに接客に努めているだけ、そのような事はありませんよ、それよりカウンターの二人上手くいっている様だよ、今女子とかSNSとか微笑みながら時にはグラス傾けている、あごグイも時間の問題、カップル誕生だね」

何気ない仕草で一平と大さんはレミーマルタンを味わっている。

「一平さんは鳥撮りが趣味と聞く、今日は居ないようだがここはその様な人が集まると聞いている、来れば交流が持てる」

と想うと大さんが言う。

「そーしようと想っているが話しておらんし偽文屋の身、重大な局面に対してはそつとしています、小生は裕ちゃんや007の映画好んで見てたよ、自分が主人公に成りきって見入ったもんだ、大さんはどーだった」

「俺はテレビ映画全盛期、太陽に吠えろとか今では考えられない取り調べ法やらドンパチ、爆破シーン多い西部警察を良く見ていた」

そんな想いで話やらアルコール談義を二人は……、いつしか客はカウンターの二人とここだけになった。

「小生は飲む時間は二時間としている、その時間がきたよーだ明後日には大仕事が控えている、大さんそろそろどーだね」

「了解そうしよう、おあいそ」

と告げた、タアーちゃんがまだいいじゃーないと怪訝気味に声を返してきた。

「一平さんとマキちゃんは三鷹まで帰るんだ、それに明日は勤めもある」

尻ポケットから財布を出した、一平を制し大さんはカードをタァーちゃんに渡した、

「この支払いぐらいは俺がするよ、出さしてくれ」

「今宵はお言葉に甘えるとします、酒代ぐらいいつも持ち合わせています、次回は払わしてくれ、数日後には美酒が飲める筈だしタァーちゃんにも会いたい、そんな時は小生に払わしてくれ」

相分ったと一平流に大さんは肯いた。

翌朝PCに画像添付E便が入った、警視庁名簿の顔写真だ自動車免許書に貼ってあるぐらい写真、チョット小さいかなと想いつつ可能な限りのぼし印刷。内ポケットに忍ばせ宅急便三鷹営業所へ向かった。プラットホームに居た長沼所長は一平を見つけ右手を挙げた。

「先日、不審な小荷物の受取した人物の写真が手に入った見て下さい」

朝の配送作業を手伝っている、先に休憩所に行ってくれと所長は言う。

事務方が入口の自販機よりコーヒーを二本出し一本を一平の前に、直ぐ来ますからこれを飲んで下さい。朝一の配送準備中のような事務方は忙しく立ち去る。

「いやーお待たせしちやって申しわかない、ご活躍は白金センターより聞いております、で今日の来所は」

「こちらこそ忙しい時にお邪魔して申し訳ない」

「プラットホーム作業の手伝いしていると皆、邪魔だと言わんばかり、早々に退却です」

一平は氣遣つて言ったと察した、来てしまった以上好意的な所長の事、出直すでもない本題を切り出した。

「今までの経緯はご存知と想い本題に入ります、この写真を見て下さいジブリ近くのワンルームマンションで二度にわたる小荷物を受け取った不審人物、この男ではありませんか。小さい画像を引き伸ばし故詳細に掛けるやもしれんがどうですか」

「あいや申し訳ない私はその男を見ていない、大前配送員が相対している」

大前君を休憩所に呼んでくれないかと事務方に伝えた、構内放送が響く。僅かながらも間を置いて大前配送員が入って来た、

「大前君この写真の男、以前二度不審な行動をしつつ小荷物を受け取った男と違う」

「ザラ付いているがこの骨格といい目付き似ています」

「半年以上前の事、無理もないがよく見てくれ」

「ピッカピカの靴に縦縞のスーツ、ソフト帽を被った全身の画像でもあれば」

チカちゃん来てくれと事務室に声かけた、先程の事務方が出てきた。

「榊原千賀子です先程はどうも」

一平が慌てて礼を返した。

「チカちゃんこの画像コピーしてくれないか、コピーしたら絵心あるチカちゃんだ、この男にソフト帽を被せてくんかな」

お安い御用と事務室に行った。

「榊原さんは絵を描くのが趣味なんですか」

「休日には絵描き道具抱え、公園やら河川に良く出かける様です、あそこに掛かっている桜満開な井の頭公園もチカちゃんの作品です、似顔絵なんかも得意ですよ、こないだも所長そのままじつとして、とか言う間に私の似顔絵がA4に」

「小生は写真だが似顔絵も良いな描いてもらおうか」

そーこーしてたら所長こんな感じでどうですか、チカちゃんが入って来た。

「大前君これでどうだ」

所長は自信に満ちた声でA4に描かれた男を見せた、

「こつこの男、しょう所長以前二度ほど不審な行動と共に小荷物を受け取った男です」

「一平さん間違いない様だ」

「大前さんありがとう、これからの捜査に役立つこと請け合いありがとう」

一平の礼を聞くとチカちゃんと大前さんは休憩所を出て行く。

「不審な行動をとった人物、荒木田輝夫は警視庁監察官相谷茂樹」

「監察官を任意同行でもをするんですか」

「それは無理、そんな事したら知らぬ存ぜぬだろう、逆に警戒されてしまう。不審行動は何の為だったか確かなる証拠を掴めんと、なんせ所轄を観察する身、一筋縄ではいかん」

「で、一平さんは今後どのような策をお使いなさるんですか、私ども三鷹営業所で出来るものに対しては協力を惜しみません」

「ありがとう、送り人の夏目浩二はピース王国大使館に入ったのを小生等は確認がとれている、夏目浩二は偽住所で何故に荒木田輝夫いや監察官相谷茂樹に送らなければならなかったかにある。明日その人物にあたる」

「日本の警察すら立ち入れない大使館、如何様な策が」

「そこで所長さんにお伺いしご協力を得なければならん」

「可能な事であれば何なりと、一平さんに協力は惜しまない」

「ありがとう、宅急便を装い三鷹、荒木田輝夫からピース王国夏目浩二へ小荷物を届ける、荷物と言っても査証申請書と称する封書便、最近は大イピング人気も手伝い査証申請も多いと聞く、申請は郵送も認められている、怪しまれずにすむ」

大沼所長は察しがついてきたようだ身を乗り出して来た。

「で、その封書を我々が届けばいいんだな」

「ありがとう、でもそこまで所長さんを煩わす事は考えていない、お願いしたいのは宅急便の大きなステッカーお借りし

たい、小生は野鳥撮影に雪道用悪路用にと軽ながら四駆があるそれにステッカーを貼り宅急便を装うへば怪しまれまい」

「お安いご用、引越し見積車のステッカーがある、これを貼れば軽でもヤマト便、社有車そのもの尚ベターだ」

「あと配送員さんの衣服を二着お貸しください」

「誰が配送員になるんだ一平さんかや」

「小生は余計な事はせんでくれと言われている、段取りがすんだら吉報待つだけ」

「ひよつとしたらあのマキちゃんと違うでは」

「ご明察、マキと気心知れた刑事さんにお任せする」

「危険と言う文字が存在しないか」

「小生が傍にいと頼りすぎる、マキの両親も刑事ゆえ基本は心得ている、立派に成し遂げられる」

「よく分かった、事の成り行きを私にも教えてくれ」

「相分った、どっちに転んでも連絡はする、否吉報を明日夕方連絡する、これから白金センターに赴き大使館前の状況、車両の出入方法及び停車場等を聞きに行つて来ます。発送前の忙しい時期にお邪魔しちゃって申し訳ございませんでした」

と言ひ一平が立ち上がった、チカちゃんが宅急便のツナギとステッカーを持って来ながら言つた。

「吉報を待っています、行つてらっしゃい」

「我々の情報によると玄関と通用口があり玄関は一般来訪者用で館員は通用口を利用している、来訪者は玄関脇にある警備室で目的と必要事項を記入し入館証を発行してもらふ必要がある。それ以上停車スペース、配置等は分かつていない」

大堀センター長は尚も続ける。